

開園50年を迎えたクマ牧場は、ロープウエーを登ったところにあり、温泉街が一望できます。美しい景色に誘われ、先ごろボスの世代交代がなったばかりの牧場に行くと、熊の雄たけびが響き、その中に飼育員の阿部智美さんと獣医師の滝田裕子さんがいました。お話を聞くと、自然の知恵は、微妙なバランス感覚がものを言ってスムーズな政権交代となり、国会のような混乱はなかったようです。

「熊の行動を理解し、彼らが動き回るときに危険がないように配慮するのが仕事の上での目標です」と語る飼育担当の阿部さんは函館市出身で、登別に来て5年になります。やはり動物が大好きで、休日には札幌市などの動物園に足が向いてしまうようですが、冬にはスノーボードも乗りこなすと趣味を語ってくれました。

一方、獣医師として登別に暮らして2年になる滝田さんは鳥取県出身で、登別に来る前も三重県などの動物園で獣医師として勤務をしていたそうです。

仕事ぶりを聞くと、「治癒を手伝えない病気にぶつかることがあり、日々悩んでいます」と話され、仕事への強い意志と動物に対する深い愛情を感じました。そんな滝田さんの休日の楽しみは温泉巡りや、青と白のコントラストで日本画の最高の匠と呼ばれている東山魁夷の画集や永田朧のイラスト画集の鑑賞だそうです。

日本にいる動物の中で最も強いと言われる熊たちと共存し、優しく接しているお二人と話していると、素直に熊の生活に合わせているその自然さが、飼育という枠を超え、友情をすら感じさせ、人間の心の広さを教えられる訪問となりました。

伊達時代村の花魁の芝居小屋にいくと『オソオセヨ（いらっしゃい）』と韓国語でお客さまを招き入れている遊び人風の町人、一八に会いました。

日本で5人しかいなくなった幫間（太鼓もち）を演じる一八こと高崎晴美さんは、小柄ですが元気印の女性で、「演技の幅が広がる太鼓もちの一八は演じがいがあります」と笑顔で応対してくれました。

名古屋から登別に来てもう10年が過ぎ、登別は第二のふるさと。「自然が美しく、仕事の疲れを癒す『温泉』は最高です」と絶賛しています。そんな彼女のもうひとつのとおきおきの場所は、遠く見渡せる美しい海岸線です。休みの日、ドライブで海を見ながら走る瞬間は至福の時、浜風の心地良さは何ものにもかえがたい癒しを感じるそうです。

近ごろは海外からのお客さまも多く、わたしたちが取材をした時も、大盛況の芝居小屋の中は、韓国人8割、日本人2割という割合で、一八の軽妙洒脱な韓国語によるジョークが大うけでした。

一八さんは、「もっと演技に磨きをかけ、いろいろな言葉で観光客の方々に『お笑い』を提供していきたいです」とこれからの目標を力強く語ってくれました。

## 熊とともに、自然に生きる



飼育員  
あべ ともみ 智美さん



獣医師  
たき た ゆう こ 滝田 裕子さん

湯のまちの若者たち

# インタビュー

開湯150年を迎えた登別温泉には、先人の功績を引き継ぎ、さらなる登別温泉の発展のため、日々がんばっている若者たちがたくさんいます。

今回は、その中から、5人の若者たちにインタビューを行いました。

## 東西東西、一八でござんす！！

たか さき はる み 高崎 晴美さん

